



日本 ハンザキ研究所ニュース 2011(11) : 通巻 No. 71

発行2011年11月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

同窓会

大学を出てから48年が過ぎた。この間には何回か集まる機会もあったが、このところはお無沙汰のままになっていた。東京でばかりやっていたのは関西方面の者の参加が少ないと言うことで、京都で開催することになり重い腰を上げて17~18日と下山した。といっても夕方遅くに宿へ入り、翌朝早く京都御所見学の一行と別れて帰ってきたので、睡眠時間を除けば6~7時間というあっという間のことであったが、やはり同窓とはいいものだと思う。卒業以来半世紀ほども会う機会が無く、古稀を過ぎた面々の中には誰だったか分からない顔もいくつかあったものの、すぐに昔に戻っていく。水産学の道を歩んだ者もあれば実業の世界で活躍したり、まだまだ現役で頑張っている者など色々だった。

私の歩んだ道は何だったのだろうかと思えて考えさせられたが“生き物一筋”だったようだ。と言うより、生き物以外のことは考えることが出来なかったというのが本音だろう。最初の教師時代2年間も生物部顧問として実験室に100余の水槽を並べて水族館にしていたし、次の40年間は姫路市立水族館で仕事できた。退職後は残る僅かな人生は好きなことだけやりたい(今までもそうだったじゃないかと言われたが、そうばかりでもないのです)とハンザキ研究所を称して川遊びに励むことにした。こんな素晴らしい施設と環境を後世に伝え残したいとNPO法人化したのが4年前だ。



54名の東京水産大学増殖学科11期の同窓生であるが、物故者もあり仕事などで不参加もあり、16名の参加者だった。卒業以来の経緯や現状報告などがあり、私はハンザキの宣伝をしてきました。それにしても左の写真のように本物の舞妓さんと芸妓さんを京都在の幹事がポケットマネーで呼んだとのこと。びっくりですね！おまけに芸妓さんが姫路出身で2度びっくりでした。



写真1 但東町のハンザキ保護現場の用水路



写真2 樹上のリス



写真3 リスの食痕



写真4 ロードキルのニホンリス



写真5 ミサゴの巣



写真6 与布土公民館でのハンザキ講話



写真7 完成した3代目のシカ止めネット



写真8 キンキラキンのアケビコノハガ幼虫



写真9 一斉に孵化した600匹のハンザキ



写真10 シマサルナシのジャム



写真11 ナガコガネグモのメス



写真12 ナガコガネグモの卵のう

リスと出会う

理事 黒田 哲郎

朝の散歩で黒川温泉近くに来た時、連れてくる犬が走り出したので前方の松の木を見ると、何か黒いものが樹上を動きました。つられて走るとそれはじっとして動かなくなったので、刺激しないようにそっと近づいてみると、その正体はニホンリスでした。見つかるまいとじっとしているようでしたが低い枝の付け根にいたので、距離としては私からほんの 2m 程度の近さでした。そして手には何かを持っている様子です。

にらみ合いではありませんが、しばらく下から見ていてもリスは固まったように動かず、再びこちらのほうからそろりそろりと離れました。そしてその後も散歩の度、何回かに一度はリスを見かけるようになりました。

時には驚いたリスが慌てて木を降り、10m ほど離れた別の木へ一目散に地面を走り、その木に駆け上る姿を見ました。樹上生活をするリスが地面を走らなければならないというのは大変な事なのかも知れませんが、走る姿が可愛らしく、リスには申し訳ありませんが、面白いものを見ることができました。

ただ、残念なことにデジタルカメラを持って行った日にはリスに出会うことが一度もなく、たまたま携帯電話で撮影出来た画像がこれ(写真2)。極めて分かりにくいものですが、個人的には野生のリスに出会え、撮影することも出来たので非常に感激しました。「カメラはいつも持ち歩かなきゃダメだよ」と栃本所長は言いますが、この時ほどそれを痛感したことはありません。

ニホンリスは冬眠しないそうですが、寒い冬を越すために松の実をたくさん食べて養分を蓄えるのでしょう。いつ出会っても忙しそうに口をモグモグさせています。そしてその木の下にはたくさんの松の実の残骸が見られます。

また、黒川ダムの上流近くでは松ぼっくりの種子を食べた後に残った芯(通称エビフライだそう)を見つけました(写真3)。この食痕は松の木の下で見つける事もあれば、松の木が見当たらない竹林の中で見つける事もあります。これを見つけると近くにリスがいるんだなと安心するようになりました。ニホンリスは九州や中国地方の一部など、見かけなくなった地域もあるそうなので、黒川の素晴らしい環境が維持され、リスと一緒に末永く共生してゆければと思います。

しかし、ここまでは昨年の話。残念ながら暖冬のせいか、今年はまだリスの姿を見ません。見かけるにはもう少し寒くないといけないのかもしれませんが。そんな訳で最近の私は松の木ばかり見上げて歩いています。

ハンザキ所長の補遺：先日2つ目のニホンリスのロードキルが届きました。この5年間で2匹目になり、数少なくなっているというのに残念なことです。すばしっこいと言う印象なのに立ちすくんでしまうのでしょうか？はね飛ばされただけのようで一見外傷もなく綺麗な標本です。(写真4)

ハンザキの夜間観察会 in 朝来市山東町の与布土川

朝来市教育委員会社会教育課では、今年度からオオサンショウウオの保護のための予算化に踏み切った。とりあえず市民からの情報に対処できるように測定道具や体内標識とするマイクロチップ打ち込みの実習と用具などの準備と、ハンザキを中心にした自然観察会を実施することになった。4町あるので、できれば各町で1回ずつ開催できればということであった。といっても、地元を受け皿がないとなかなかスムーズにことが運ばないので、とりあえず今年はハンザキ研お膝元の生野町で3回実施し、最後に山東町で少々夜寒の時期になってしまったが開催できた。地域の“かえるの郷”のメンバーを引き連れて代表の藤本邦彦さんたちが地元の円山川水系与布土川（よぶどがわ）のハンザキの出現を確認することを引き受けていただいた。

この川は街中を流れる比較的小さな流れであるがダムの建設が進められており、事前調査などで45個体が登録されている。地域には自然環境に関心の深い市議会議員もおられ、これまでも人工繁殖巣穴での孵化も確認できたり、堰などの小規模な改修工事に際しても工事業者も注意深く、工事中の救出にも何件か対応してきたところである。人工繁殖巣穴設置だけでなく、護岸の裾が流された跡などにコンクリートU字溝等を緊急的に差し込んでおいて、予算化された後には“はんざきブロック”などの既製品で本格的な工事をするなどしてきた。平成16年の大水では大変な災害も発生したが、ハンザキたちの生存が心配されていたのである。

朝来市の垣尾教育長さんなどの参加、祝辞もあり1時間ほどのレクチャーを与布土公民館で行ったが、藤製の座椅子が用意されており楽な姿勢で参加者は話を聞いてくれたようだった（写真6）。この間に先発隊が5個体のハンザキを確保しておいてくれたので、民家の庭を拝借しての測定やマイクロチップの読み取りと打ち込みができた。1個体が新規登録となり4個体は再捕個体であった。登録してから6～8年間の追跡中のものであり、大水に負けずに生き残っていたようである。しかし、成長はほとんど無く餌事情の厳しさがしのばれた。このように地域の方々との協働は大切なことであり、講義の最中に「フーン」という大きな相槌を小学生の坊やからいただいたが、大変良かったと思う。地域の将来を担うであろう子供たちに、中々観察しにくい夜行性の動物の真の姿を目に心に焼き付けることが出来たら大成功だと思う。

兵庫県下の自治体では、住民からのハンザキ情報にどのように対応しているのだろうか？ 豊岡市・養父市・宍粟市・朝来市などでは計測道具や標識、情報整理票などが揃っているが他はどうだろうか？ 水族館や動物園などの博物館施設があるところは学芸員に頑張ってもらいたい所だが、そのような施設の無いところではどうしたらいいのだろうか？ 各自自治体の文化財担当者と言っても、各分野ごとの専門家が揃っているわけではなく、人事異動で次々と職員が変わっていくのであるから、申し送り書的なものが必要だと思う。“ハンザキ取り扱い事務必携”が必携なのかもしれない。

円山川水系におけるオオサンショウウオ事情⑥

会員 加賀見 省一 (但馬国府・国分寺館)

11月8日の朝、本庁(豊岡市)の文化振興課から電話がありました。内容は、「但東町(豊岡市)でオオサンショウウオが見つかったので、日本・モンゴル民族博物館の職員に行ってもらおうようにしたが、マイクロチップの挿入ができないので、都合がつかないか」ということでした。モンゴル博物館の職員に電話で大凡の場所を聞き、住宅地図で確認、道具を一式積み込んで但馬国府・国分寺館の学芸員と現地に向かいました。

集合場所の但東町奥矢根の公民館に行くと、すでにモンゴル博物館の職員がオオサンショウウオを広場に運んでいました。計測も終えており、全長 80.0 ㎝、体重 3,520 ㌊の個体で、マイクロチップは未挿入との報告を受けます。その後、噂を聞いたご近所の方々がオオサンショウウオを一目見ようと集まって来られました。興味深く質問をされたり、携帯電話で写真を撮ったりと、にぎやかな中で作業を進めました。全長と細部の写真撮影を行い、念のために再度マイクロチップの有無を確認した後、チップの挿入をしました(チップ番号 0006CC75C5)。

作業を終え、発見された場所に案内してもらいました(写真1)。集落内の民家の中を流れる幅約 50 ㎝、深さ 20 ㎝程度の水路で、頭を上流に向けていたそうです。水路は南に流れ、東を流れる奥矢根川に流れ込むことから、奥矢根川に放流をしました。今まで奥矢根川でオオサンショウウオの保護記録はありませんが、以前にも見たことがあるという方もおられたので、もともと棲息していた可能性もあり、今後の発見が待たれます。

実は、ハンザキ研ニュースにこの原稿を送ってから、後日談がありました。

11月14日の正午前にモンゴル博物館の職員から電話で、「この前の近くで、またオオサンショウウオが見つかりました」との連絡がありました。この前と同じ場所で待ち合わせることにして現地に出向くと、この前のお宅の前にモンゴル博物館の車と数人の姿が水路を覗いているのが見えました。何と、同じお宅の水路でまたオオサンショウウオが見つかったということです。残念ながら、今回は、水路の継ぎ目のコンクリートの割れ目に入ってしまっただけで出てこなかったため、しばらく待ってから帰りました。

発見された方によると、見つかったのは前回とほぼ同じ場所で、見ている間に下流側に流れて(泳いで)、穴の中に入ってしまったということです。前回の個体よりも 10 ㎝ほど小さかったように見えたそうです。

この地点は西から東へ流れる水路と、北から南へ流れる水路が十字に交わる場所です。農閑期のため、北から流れる水は、ここで堰き止められ、水は東に流れて奥矢根川に入ります。水路の規模から、この水路で棲息していないと思いますが、既成概念にとらわれずに、一度付近を観察してみようと思います。

今回も、皆さんの「助けてやりたい!」という想いが、オオサンショウウオの調査・保護を支えてくれていると改めて実感しました。

ハンザキ所長の補遺: 奥矢根川は出石川の支流になります。但東町矢根には出石川矢根大堰という自然の大きな堰(多少の手は加えられています)があり、ハンザキの移動の関所になっていましたが、県土木の工夫によって最近1個体の遡上が確認された場所です。

バード・ウォッチング

秋の野鳥観察会を実施した。講師は日本野鳥の会や日本鳥類標識協会などで活躍の脇坂英弥さんである。以前は姫路市環境学習施設である伊勢自然の里でレンジャーをしておられたので比較的近かったが、現在は京都からの出張である。その上、標識調査のために許可を得た霞網のセットのために未明に京都を出発しなくてはならない。昨年の観察会ではホオジロの雌雄が網にかかって標識取り付けの実演を見せていただいた。今年は残念ながらネットインする鳥がいなかった。ウォッチングは銀山湖の左岸側を2時間くらいかかって歩きながら10種ほどの鳥が確認できた。時期的にあまり良くなかったようでしたが、これは年間を通じてのチェックも兼ねている観察会なのでかまいません。植物やキノコの観察会も同じ考えで、ハンザキ研の四季を把握していくつもりなのです。

それにしても、団体で歩きながらの観察会は難しい所があると思いました。リーダーを先頭に静かに鳥を驚かさないように歩かないと、鳥に先に気付かれて逃げられてしまいます。銀山湖の水面にも鳥の姿が無く残念でしたが収穫はありました。この人工湖を作っているのは生野ダムですが、その堤体のある付近の地名は“鷹の巣”なのです。環境調査報告書にはオオタカやハヤブサなどの確認が記載されています。今回は猛禽類は観察できませんでしたが、魚食性の鷹ミサゴの巣が3か所で確認できたことで、皆さん大喜びでした。1つは、“あこバス”の運転手さんに以前に教えていただいていた物で、みえみえの場所でしたが、残りの2つは私たち素人には脇坂講師に教えてもらわねば分からない場所でした。

来年の繁殖シーズンに再び古い巣を使用するのかなど、産卵期はいつ頃になるのか、我が図書室の僅かな資料では分かりませんでした。どうも、鳥の一般書と言うのは見分け方についてのみに偏っているようで、生態についてはあまり記載が無いようです。鳴き声の聞き分けや抜け落ちていた羽も重要なバードウォッチングのポイントになります。鳴きまねのうまいのはカケスでしたでしょうか、本物との聞き分け方はどうするのでしょうか？山奥から「ワンワン」という犬？の鳴き声が聞こえてきます。役立たずのために捨てられた猟犬かと思ったら、フクロウなのだそうです。本当なのかなと思います。確かめる手段がありません。信ずるのみですね。それにしてもワンワンといわれても困ります。

脇坂先生の話の中で、オシドリは生態は驚きの連続でした。冬になると各地に集団でやってくる（渡り鳥？）美しい（オスの方ですが・・・）姿の水鳥です。餌はドングリであるということと共に樹上性であること、樹洞に営巣するという生態は驚きです。

.....

シカ止めネット・・・今月の作業ボランティア

6年間で3回目のネットの整備になりました。今回は金網とポールを前田常雄先生からいただいたのがっちりした網張りができました（写真7）。それに神戸から2回目のボランティア参加の辻さん（夏に自転車でも神戸からやって来た、虫に大変好かれた青年）と教師志望の友人という若い助っ人の力もありました。

ハンザキ研日誌

2011年11月

- 2日 鳥取県八頭県土整備局から視察に来所
- 3日 姫路市役所水産課の清水邦一さん“アカクミ”を届けに来所
- 4日 大阪府安威川ダム建設環境委員会出席
- 5日 NPO事務局会議、6名出席
- 9日 中日新聞、世古記者ハイブリッド・ハンザキの取材に来所
- 10日 “大きなオオサンショウウオ” 記載の福岡・橋本両氏他視察に来所
- 12日 ・秋の植物観察会（前田常雄講師）実施、ハンザキ研構内の樹木マップ作りへ
・神戸市立須磨海浜水族園の東口さん等4名視察に来所
- 14日 カモガワ・ハンザキの全個体測定とクリッピング（指切りによる年齢査定研究）
- 16日 神戸市立須磨海浜水族園にて“南アフリカの自然保護 100 年”の講演会へ参加
- 17日 京都にて大学時代の同窓会
- 20日 ・野鳥観察会（脇坂英弥講師）実施、銀山湖左岸側で、ミサゴの巣を3か所
・中日新聞にカモガワ・ハンザキの記事掲載
- 21日 ・3回目のダウン、後頭部に裂傷
・ハンザキ研ニュースNo.70 刊行
- 23日 黒川温泉祭り開催、“クロカワ・ダイコン”のうまさ格別
- 24日 ・兵庫県生物学会の橋本光政さん他見学に
・雪虫今期初
- 25日 ・養父市の前田常雄先生よりシカ止めネットと支柱受贈
・サンド・ポンプ購入、30万円
・ガードレールの裏側に暗褐色のペインティング
- 26日 朝来市第4回ハンザキの夜間観察会、山東町与布土川にて、朝来市教育長など
16名とスタッフ10名で5個体測定
- 27日 作業ボランティア4名とスタッフ4名でシカ止めネット設置や屋根雪止め工事
- 28日 与布土川のデータの整理、46個体のマイクロチップ登録
- 29日 旧・姫路工大ワングル部OBの岡村・吉田両氏による簾野～ハンザキ研トレッキングルート探索、～30日

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

年齢を重ねると昨日のことは忘れていても、何十年も前のことはよく覚えていると言うことは事実だと思う。ハンザキ研構内で、何かを取りに行くところとそこで別の作業に取り掛かり、何を取りにいったのかを忘れてる。同窓会では随分前のことなのに、学生時代や卒業後も含めて彼にはあそこで世話になったとか、昨日のことに鮮やかに思い出す。多くの同窓にお世話になったことを改めて礼を言いたいと思うが.....